慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評 : 池上彰・ 大石裕・ 片山杜秀・ 駒村圭吾・ 山腰修三著『ジャーナリズムは甦るか』慶應義塾大学出版会、2015年
Sub Title	
Author	高木, 智章(Takagi, Tomoaki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2016
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.21 (2016. 7) ,p.101- 103
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20160702-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：池上彰・大石裕・片山杜秀・駒村圭吾・山腰修三著

『ジャーナリズムは甦るか』慶應義塾大学出版会、2015 年

高木　智章

本書は、2014 年に起こった朝日新聞の一連の誤報問題、及びそれに関連して巻き起こった「朝日批判」をめぐって、ジャーナリストの池上彰、さらには慶應義塾大学の研究者たちが議論を行った内容を掲載したものである。

第一部においては、池上彰氏と慶應義塾大学法学部教授の大石裕が、朝日問題について対談した内容が掲載され、第二部では、第一部にて池上氏と対談した大石裕、慶應義塾大学法学部教授の片山杜秀、駒村啓吾、さらには同大学メディア・コミュニケーション研究所准教授の山腰修三の 4 名が、朝日問題とジャーナリズムを論じた座談会の模様が掲載されている。

本書は『ジャーナリズムは甦るか』という題名からも見て取れるように、当然のことながら「ジャーナリズム」に関する話題が中心となるが、それでも論点は多岐にわたっている。そもそも朝日誤報問題は、吉田調書に関しては原発問題、吉田証言に関しては歴史認識問題と、いづれも国論を二分するような大変難しい争点をめぐり議論となったものであり、池上彰氏のコラム「新聞ななめ読み」掲載拒否問題は、どちらかと言えば、ジャーナリズム組織論としての色彩が強い。

それでも朝日誤報問題・「朝日批判」をめぐる本書の議論を読み解くうえで、重要な対立軸をもうけるならば、それは以下のようになるだろう。すなわち、ジャーナリズムを社会的文脈（及び価値観）から切り離し、それを技術的・規範的に捉えるのか、或いは、それを社会的価値観と不可分で決して切り離せないものとして捉えるのか、ということだ。

こうした対立軸は、第一部の池上・大石対談から顕わになっている。池上氏は誤報の問題をジャーナリズムの技術的側面から見て批判していく。「朝日批判」も、それは究極的にはジャーナリズムという「営為そのもの」の問題であり、それを通じて朝日的な価値観が批判されるのは間違いであるとする。一方で大石は、池上氏のそうした見解に同意しつつも、朝日誤報問題・「朝日批判」をより広い社会的文脈の中において捉え、問題化しようとする。すなわち、「リベラル／保守」という形に二極化した現代の言論空間に、ジャーナリズムを位置づけ、「朝日批判」を「リベラルな世論に対する脅威」の問題として見なすということである。この点は、対談では前面化していないが、対談後、雑誌『Journalism』に書かれた大石の評論では強調されている（大石裕「池上氏との対論で再確認した多様な原論があることの価値」『Journalism』朝日新聞社．2015 年 1 月号）。それゆえ、この対談で両者の主張は少しばかりかみ合っていない印象を受ける。池上氏は朝日問題を「リベラル／保守」という社会的価値観の中における問題にはめ

高木智章「書評：池上彰・大石裕・片山杜秀・駒村圭吾・山腰修三著『ジャーナリズムは甦るか』」
『三田社会学』第 21 号（2016 年 7 月）101-103 頁

込むことに極めて慎重で、それゆえ彼がもっとも饒舌に持論を展開しているとみられるのは、自身の記者経験を踏まえた「ジャーナリストとは何か」ということに関する話題であった。もちろん、この点は、この点で、本書を読む人（とりわけ将来ジャーナリストを志望する者たち）に貴重な示唆を与えてはくれるのだが、朝日問題の本質を見つめ直すには幾分不十分なものとして、第一部の限界を提示しているとも言えよう。

第二部においては、大石・片山・山腰が、ジャーナリズムと社会的文脈を切り離せないものとして捉え、吉田調書や吉田証言の問題を、戦後日本の歴史的文脈や価値観と連動させながら、ジャーナリズムを分析し議論を展開する一方で、駒村はジャーナリズムをより規範的なものとして捉えて、朝日問題を議論する。事実、大石・片山・山腰は、戦後日本の歴史やイデオロギー的価値観に十分に触れながら、朝日問題を分析していき、新聞が社会的価値観を大いに反映させながら、そして「価値の伝達」の役割を引き受けながら、報道を行ってきたきたことを明らかにすることで、朝日問題の本質に迫ろうとする。他方、駒村は、文中の「政策や思想のアクターとしてメディアをとらえるという見方それ自体が、おそらくジャーナリズムを考えるときに大きな障壁になる」（P72）という主張に明瞭に見られるように、朝日問題を社会から切り離し、党派的利害を超えて、ジャーナリズムを論じようと試みている。

こうして、第二部でも、上述の対立軸は必ずしも収束していくわけではない。しかし、各論者が今後のジャーナリズムの方向性として提示するものは、一致を見ているように思われる。それはジャーナリズムがフォーラム機能を備え、公共性を担っていくべきだとする見解である。

第一部で、池上は多様な価値観を保証する自由な言論空間が日本にあることを肯定的に捉えており、第二部でも、各論者が今後のジャーナリズムに必要な要素を考察する上で念頭に置くのは、メディアの実直な検証報道や、それに基づく「多様性の尊重」という観点である。社会が複雑化し、多様なメディアの登場によって、より多くの情報に触れる機会を人々が得ている現代においても、情報を偏らずに報道し、出来事を詳らかにし、精査し、公共性を担保するために情報発信を行う主体は必ず必要となることが、本書では了解されている。今回、朝日新聞が槍玉に挙げられ、批判の対象となることで、ジャーナリズムが本来担っている、あるいは担うべき役割や使命が見失われるべきではない。そうしたメッセージは各論者に共通するもののように思われる。

そして、このことを想起するとき、本書が持つ、その時局的な意味を考慮しないわけにはいかないだろう。本文中や「あとがき」において大石が述べるように、本書は拡大する「朝日批判」の中に「リベラルな言論空間の危機」、あるいは「リベラリズムの価値観そのものの危機」を見て、それに一つの「待った」をかける試みとして書かれたものであった。本書が提示したジャーナリズムの今後の方向性は、誤解を恐れずに言えば、ありふれたものであり、メディアを論じる際にはよく言われることである。しかし、朝日誤報問題・「朝日批判」を通じて明瞭化しつつある、現在の言論空間の一種の「偏狭さ」を考えれば、だれしもそうした提言を含む本

書の持つ重みに思い至るであろう。問題の渦中にあった池上氏を対談の場に呼び、それについて研究者たちが、それぞれの立場から見解を述べたのである。大石は「あとがき」で、この問題を黙って見過ごす「研究者の不作為」を看過できるものではなかったと述べている。こうした点を鑑みれば、本書は「朝日批判」に潜在する言論状況に、対抗する、ジャーナリストや研究者たちの「アンガージュマン」の軌跡であったとも言えまいか。こうした観点からも、本書は読まれ、位置づけられる重要性があるように考えられる。

（たかぎ　ともあき　慶應義塾大学大学院博士課程）